

英語史における疑似受動文の変異について

久米祐介

1. はじめに

現代英語では、(1)のような前置詞の目的語が主語として現れる疑似受動文が観察される。

(1) a. This question will be *dealt with* later in the book. (高見 (1995: 40))

b. *This bridge* has been walked *under* by generations of lovers. (Bolinger (1975: 69))

(1a)では、前置詞は動詞と強く結びついており、句動詞を形成している。ここでは(1a)のタイプを句動詞タイプと呼ぶ。これに対して、(1b)の前置詞は動詞ではなく、表層の主語と結びついて前置詞句を形成している。ここでは(1b)のタイプを前置詞句タイプと呼ぶ。高見(1995)は、疑似受動文には(2)のインヴォルブメント制約と(3)の特徴づけ制約が課せられると主張している。

(2) インヴォルブメント制約

英語の受身文が適格となるのは、能動文において、その他動詞が表す行為や状態に目的語がインヴォルブ（関与）している場合、言い換えれば、他動詞が表す行為や状態によって、目的語に何かがなされたという事が示されている場合である。 (高見 (1995: 31))

(3) 特徴づけ制約

英語の受身文は、主語がその受身文によって特徴づけられている場合に適格となる。

(高見 (1995: 59))

(1a)では、This question は deal with の直接対象であり、その行為にインヴォルブしているので、This question に対して何かがなされると解釈される。これに対して、(1b)では、橋の上を歩くのではなく橋の下をくぐると解釈されるので、walk の表す行為にインヴォルブしていないが、何世代もの恋人たちがその橋の下を歩くことによって他の橋とは異なるものと認識されていると解釈され、特徴づけ制約を満たしているといえる。高見にしたがえば、(疑似)受動文は(2)と(3)のどちらか、またはその両方の制約を満たす必要がある。本論文では両タイプの疑似受動文の通時的变化を明らかにしたうえで、これらの制約がどのような統語構造の変化から説明されるのかを議論する。

2. 中英語

Dreschler (2015)は関係詞化に伴う前置詞残置が関係節内の受動化に伴う前置詞残置に拡張したことが疑似受動文の出現の主な要因であると述べている。(4)は関係詞化による前置詞残置、(5)は受動化による前置詞残置の事例である。

(4) for noman to him hade suspesion, for enchesoun of
for nobody to him had suspicion, for reason of
his habit þat he was *in clopede*,
his habit that he was in clothed
'For nobody suspected him, because of the clothes that he wore,'

c1400 (cmbrut3,63.1884)

(Dreschler (2015: 121))

(5) Was neuer prince, I wene, þat I *written of* fond,
[there] was never prince, I know, that I written of found,
More had treie & tene
more had vexation and sorrow
'I never found a prince who was written of and had more suffering.'

c1338 (Rob. Of Brunne, Chron. Pt. II, p235)

(cf. Dreschler (2015: 112))

Dreschler はこの残置された前置詞と動詞が融合して、ひとつの他動詞として再分析されたことで疑似受動文が可能になったと主張している。これは、他動詞の受動文と自動詞+前置詞の受動文が等位接続されることから支持される。Dreschler の主張が正しければ、中英語の疑似受動文はすべて句動詞タイプということになる。前置詞句タイプの疑似受動文については、初期近代英語のコーパス PPCEME を用いて独自の調査を行った。結果と分析については、次節で示す。

3. 初期近代英語

ここでは、PPCME2 と PPCEME を用いた調査結果に基づき、初期近代英語における疑似受動文の頻度と動詞と前置詞の組み合わせパターンのバリエーションの推移をみる。M3-M4における疑似受動文の生起数は54例で1万語あたりの頻度は0.066であった。これに対して、E1では生起数は76例で1万語あたり1.339、E2では162例で1万語あたり2.578、E3では179例で1万語あたり3.305と時代を経るごとに飛躍的に頻度が増していることがわかる。この頻度の増加に伴い動詞と前置詞の組み合わせパターンも増加する。M3-M4の疑似受動文の動詞と前置詞の組み合わせは34パターンであったが、E1で38パターン、E2で85パターン、E3で92パターン見つかった。この頻度とパターンの増加に伴い、(6)のような前置詞が動詞と結びつき句動詞を形成するのか、前置詞が意味上の目的語すなわち表層の主語と結びつき前置詞句を形成するのかについてあいまいな例が増加していったと考えられる。

(6) and here was *sat upon* at Westminster in the Parliament-Chamber. (THOWARD2-E2-P1,1,89.216)

さらに、前置詞が主語と結びつく前置詞句の解釈のみが可能で、句動詞を形成しているとは解釈されない事例もみつかった。

(7) a. This place is wonderful *dikid about* (LELAND-E1-P2,120.347)

b. for all about is not to be *rode on* unless it's a very dry summer; (FIENNES-E3-H,150.229)

c. St. Winfreds Well is *built over* with stone on pillars like a tryumphall arch or tower on the gates of a Church; (FIENNES-E3-P2,180.288)

4. 疑似受動文の統語変化

Dreschler の動詞と前置詞の再分析による疑似受動文の派生に基づき、ここでは句動詞タイプは(8)の構造であると仮定する。

(8) [TP DP_i [T [T be] [vP v [VP V+P t_i]]]]

(8)では、VはPと融合し句動詞を形成し、DPはV+Pからθ役が付与されるが、vは外項を欠くため対格は付与されず、TP指定部へ移動し主格が付与される。句動詞タイプに(2)の制約が課されるのは、句動詞がDPにθ役を付与し、そのDPがV+Pの表す行為や状態の直接対象になるからだと考えられる。これに対して、前置詞句タイプは(9)の構造であると仮定する。

(9) [TP DP_i [T [T be] [PredP t_i [Pred^{pred} Pred [vP v [VP VP [PP P PRO_i]]] byP]]]]

(9)では、動詞と前置詞は融合するのではなく、PPはVPに付加している。DPは属性叙述を表す機能投射Predの指定部に、Pの補部には空の代名詞PROが基底生成し、Pred指定部のDPとの一致により同一指標が付される。(8)の句動詞タイプの構造では、動詞と前置詞の融合体が目的語にθ役を付与するが、(9)では前置詞の目的語は動詞に支配されていないためθ役は付与されない。このため、動詞の行為や状態の直接対象とはなりえず(2)の制約を満たすことはできないということになる。その一方で、DPがPred指定部に基底生成することでvPと叙述関係を形成し、主語の属性や特性が描写され、特徴づけ制約を満たすことができると考えられる。

5. 結論

本論文は疑似受動文の歴史的発達過程を明らかにし、その統語構造の変化を示すことで、句動詞タイプに課せられるインヴォルブメント制約と前置詞句タイプに課せられる特徴づけ制約がどのように生じるのかを説明した。

参考文献

Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English," *The First LACUS Forum 1974*, ed. by Adam Makkai and Valerie Becker Makkai, 57-80, Hornbeam Press, Columbia, SC.

Dreschler, Gea (2015) *Passives and the Loss of Verb Second: A Study of Syntactic and Information-structural Factors*, Doctoral dissertation, Radboud University Nijmegen.

高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版, 東京.

コーパス

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2)*, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*, University of Pennsylvania, Philadelphia.